

学問論

0、本勉強会について

1、はじめに

第一章

2、知識人達の考えを参考に

第二章

3、楽しさから始まる学問

4、生きにくさから始まる学問

第三章

5、学問観の非共有

6、結びにかえて

0、 本勉強会について

竹田青嗣の文章からの引用で本稿を始めることにしよう。

「ある頃から本を読むという習慣がついて、文学や思想の世界に迷いこんでしまった。こういうことを勉強しようというはっきりとした目標があったわけではない。ただ自分の中に不安な穴があって、なにかでそれを埋めようとしてやみくもに本を読んでいたような気がする」 竹田青嗣 『自分を知るための哲学入門』 あとがき

今回の勉強会で扱うのは「学問」である。広辞苑によれば学問とは「一定の理論に基づいて、体系化された知識や方法」だという。私がこの場で対象とする学問は、広辞苑の記す知識や方法そのものだけではなく、「一定の理論に基づいて、知識や方法を体系化すること」という行為としての学問も含む。今回、学問の定義はこの二つを用いる。

政治を対象とする政治学（広義には社会を対象とする社会科学）を研究する場において、学問を対象とする研究の発表に戸惑いを覚えるかもしれない。しかし竹田青嗣がいうように、私も特定の学問をしようと思って勉強してきたつもりはない。ただ、「自分の中の不安な穴」を埋めるために本を読み、考えてきた結果、学問というものを扱っていたに過ぎない。

また、学問を研究の対象にするということは、普段私たちが「政治」や「社会」を研究している行為そのものを考察の対象にするということである。あえて区別を施すならば、これから行うのは「政治」学研究ではなく、「政治学」研究ということになる。この理論をもって「政治学研究会で学問を対象とする研究を発表することは場違いである」という批判に答えることにする。二次的な結果に過ぎないが、学問を対象とするというメタレベルの考察が、各会員にとって当然の前提であった学問という行為の見直しとなれば幸いである。

1、はじめに

前節の学問の定義からすれば、本というのは何者かの体系化された知識や方法を発信する媒介ということになるし、講義や講演会なども同様なものと考えてよいだろう。本の執筆者や講師は先ほどの行為としての学問を営んでいることになる。と、同時に読み手や聞き手は発信される情報を体系化している限りで学問に携わっているということになる。

今、情報の受信者になったことがある貴方に問おう。次のような経験はないか。

発信されている情報は理解できる。しかし、この学問が何のためになるのか。あるいは何を意図して発信者は当学問を研究しているのかが分からない…。¹

例えば、法律学における場合。ある事案をめぐって A 説と B 説の間で論争がある。ところが、どちらの説を採用しようとも結論だけ見ればほとんど相違はない。ただ、両者は正当化の仕方の違いがあるのみである。実務家からすれば、結論に違いがないものに労力を使って論争を続けるのが馬鹿馬鹿しく見えるであろう。

あるいは数学。ある式が正しいことを証明するために多大な時間をかけ、証明が終了したとする。だがその証明によって得られたものは何なのか。この証明が何の役に立ったのか分からないという場合。

断っておくが私は法律の専門家でも数学の専門家でもない。一見無意味に見える領域でも膨大な知識に裏打ちされれば、万人が納得できるような意義を持っているのかもしれない。しかし、今回は受信者側にその分野での知識が例え豊富にあったとしても、やはり何のための学問なのか、発信者はなぜこの学問を研究しているのかが理解できない学問に限

¹ 「犯罪学は実際に起こる犯罪を対象として、なぜ人は犯罪を犯すのかを考えます。犯罪学は何のための議論かわからないような空理空論を嫌います。(瀬川晃 「犯罪学の理論と実践」 『AERA Mook 犯罪学が分かる』 2001)

定して考える。この学問を以下では「空虚な学問」と呼びたい。この空虚な学問は常に受信者側に立ち現れる。すなわち、発信者は決して空虚だとは思っていないのに、受信者にとっては空虚なものとして現れてしまうのだ。

私はこの空虚さを残念なことだと捉えた。どれほど研究者が労力と時間を使い情熱を燃やそうとも、受け手には空虚なものとして伝わってしまうのだから。この温度差の原因は何なのか。本論の出発点はまさにこの点にある。出発点を問題意識として捉えても、動機やきっかけとして捉えてもらってもかまわない。

この問題意識（後述するが私の場合は「生きにくさ」という概念が適切である）に基づき、私は以下で空虚な学問が現れてしまう原因を考察したいと思う。本論の構成は次に記す通り。

まず第一章で空虚な学問が現れる原因を、知識人たちの考えを用いていくつか取り上げる。私一人の意見を述べるだけでは、私が考える原因以外の視点が入りにくくなるからである。次に第二章ではなぜ空虚な学問が現れるのかについての私見を述べる。最後に第三章では今までの考察をふまえ、総括をする形でなぜ空虚な学問が現れるのかに対する本論の結論を述べることにする。

第一章：なぜ空虚な学問が現れるのか

2、知識人たちの考えを参考に

本章では知識人たちの考えを見ることで空虚な学問が現れる原因を考えていく。ただ、彼らが私のいう空虚な学問という概念について、直接言及している訳ではないことはあらかじめ了承してもらいたい。

(i) 大きな物語の凋落 : 東浩紀

大きな物語とは「成員を一つにまとめあげるためのシステムの総称」²とひとまず定義することができるが、別の見方をすれば「規範や意味が効力を持つための前提条件」³ということになる。具体的に言うならば、思想的にはキリスト教の神それに代わる人間の理性や真理、政治的には国民国家や革命のイデオロギーなどが挙げられるであろう。

² 東浩紀『動物かするポストモダン』（講談社現代新書 2001） 44 頁

³ 東浩紀・大澤真幸『自由を考える』（NHKブックス 2003） 28 頁

近代では支配的であった大きな物語であるが、ポストモダンにおいては大きな物語は機能不全に陥ることになる。ポストモダンの特徴が大きな物語の凋落という現象を要素として含んでいるのなら、当然学問の世界にも当てはまるということになるだろう。

では、学問の世界における大きな物語が凋落するとはいかなるものか。まず、19 世紀以前ではキリスト教的な世界解釈としての学問は不可欠の要素であった。例証するならばニュートンの例を用いるのが適切だろう。彼は今日で意味するところの科学者というよりは哲学者であり、神学者であった。学問は神が創った世界を理解するためのものであり、神は大きな物語として存在していたのである。

神という大きな物語は、19 世紀の近代科学と絶対的な人間の理性や真理の登場に取って代わられることになる。その後、学問においては真理だけでなく、よい国のための学問やよい社会のための学問という大きな物語が存在したと考えられる。が、ポストモダンではそれらの大きな物語は徐々に凋落し始める。これは特に学問の世界においては絶対主義的見方（主に西欧）を再考する動きが見え始めたことに深いつながりがあるだろう。

このようにして、「真の神への道」「真の真理への道」⁴としての学問は凋落し、大きな物語としての説得力を失っていった。その結果、学問の意味や意義というものは各個人が自身で解釈（設定）せねばならなくなる。しかもそれが絶対的な大きな物語とはもはや成りえない以上、自分の設定した学問の意義は常に否定される可能性を含むことになるのである。

換言すれば、各人の持つ学問への意味づけは異なるということである。つまりある人にとっては大変意義深いことであっても、その意味付けを共有していない他者にとっては全く無意味であるという状況が起こりうる。空虚な学問はここに現れるのである。

(ii) 「世間」という存在 : 阿部勤也

ポストモダンからの視点からは少し離れて、ここでは阿部勤也の「世間」という考え方⁵を参考に空虚な学問が現れる原因を探ってみよう。

「世間」とは社会と個人との間の中間的な共同体のことである。西欧から社会と個人という概念が輸入されたが、「世間」という共同体も解体せず並存してしまった。個人は社会ではなく、「世間」を意識して行動する。しかもそれが一見すると社会に向けて行動されて

⁴ マックス・ウェーバー 尾高邦雄訳『職業としての学問』（岩波文庫 1936） 42 頁

⁵ 阿部勤也『学問と「世間」』（岩波新書 2001）

いるかのように映るという状況が、現代の日本に見られるというのが阿部氏の主張である。

そして学問の世界においてもその構図は変わらない。学者や研究者と呼ばれる人達は学会という「世間」に属することが一般的であり、その中では「世間」を意識せざるを得なくなる。その結果、研究や報告は学会という「世間」に向けられたもの（極端に言えば学会が望ましいと考えるもの）を目指すものになってしまうのである。

研究が「世間」に向けられたものである以上、社会の中にいる一般の人にとっての研究ではもはやない。にもかかわらず、発信者側は「世間」ではなく社会に対して学問を伝えるという形をとる。このようにして受信者側には空虚としか思えないような論文や報告が届けられる。それは発信者が社会に属する個人を対象にして学問を伝えているのではなく、学会という「世間」に対して伝えようとしている（ここで意識 / 無意識は問わない）からである。

(iii) 「退屈な学問」 : 村上陽一郎

前述二つの考え方とはまた異なる見解を、村上陽一郎氏の文章⁶から提示してみよう。

まず、われわれの知識体系は程度の差はあるものの、論点先取りの要素を含んでいる。先取りの要素はどの学問領域にも存在し、また完全に排することは不可能である。よって、先取りの知識を得ていけばいくほど、学問としての学問らしさは強くなっていくが、それはある種の危険を含んでいるという。つまり、学問がすでに決まっていることを確認する作業に徹してしまうという危険のことである。

これは歴史学や数学において顕著に現れているだろう。歴史にしる数学の証明にしる、ある程度疑いようのない事実や証明の方法・公式などの知識は変更することがない。ゆえに学問は、すでに見えているものを確認するという作業に見えてしまうのである。村上氏は学問のこの側面を「退屈な学問」と呼んだが、これこそまさに空虚な学問を生み出す一つの原因であろう。しかも、学問が論点先取りの側面を拭いきれない以上、この空虚さもまた必然的に現れてしまうのである。

しかし、村上氏の考えはここで終わっていない。学問にはこの退屈な学問という側面の他に喜ばしき学問という側面があるという。喜ばしき学問については Section.3 で扱うことにする。

⁶ 村上陽一郎「自己の解体と変革」 『歎ばしき学問』(岩波書店 1980)

第二章：なぜ空虚な学問が現れるのか ー私見ー

前章での考えはひとまず置き、本章では空虚な学問が現れるのはなぜかということに対する私の意見を述べたい。ところで本章の経緯を説明すると、私はまず学問の「楽しさ」に空虚さの原因があるのではないかと考えた。そして楽しさから始まる学問を否定し、空虚さを作り出さないために「生きにくさ」から始まる学問を提示しようと考えたのである。

しかしながら、楽しさから始まる学問を検証するうちに、生きにくさから始まる学問にも空虚さを作り出す可能性があるという結論に私は至った。表面上は2つの私見が並列に並んでいるように見えるが、実は上のような経緯があったことを頭の片隅に置いていただきたい。私の論理展開をより正確に理解するのに役立つであろうから。なお、二つの Section のどちらも(a)では関連用語を説明・整理し、(b)で空虚な学問が現れる原因について記している。

3、楽しさから始まる学問

私は本章の冒頭で結論を先に述べた。すなわち、私は楽しさから始まる学問が空虚さを作り出していると考えるのである。その理由は後述するが、その前にここでいう楽しさとは何であるのかをある程度明確にしておく必要があるだろう。以下で説明を加える。

(a) 学問の「楽しさ」とは

学問の「楽しさ」とは何なのか。学問の楽しさという個人に依拠するところが大きい感情をある程度普遍性を持たせて表現するには執筆者の力が及ばない。よってここでは再び村上陽一郎氏と、小林康夫氏の提示する学問の楽しさを紹介するにとどめたい。

村上陽一郎は学問の楽しさを「自己解体」あるいは「パラダイム変換」という表現を使って表す。自己解体とは簡潔に言えば「驚き」であり、近い表現を探すなら「目から鱗が落ちる」ということになる。

この自己解体の例を彼は文化人類学と、そしてその応用としての歴史学を用いてあげている。例えば自分の今まで住んでいた国とはまったく違う国へ行く。言語も風習もまったく違うその国で貴方は驚きを得るだろう。それは未知なるものに出会う驚きだけでなく、自分があまりに自明としていたために気づかなかったものを、初めて気づかされる驚きがあるだろう。この文化人類学的な驚きは共時的な視点からの驚きであるが、通時的な視点

からの驚きが得られる学問が存在する。それがまさに歴史なのである。

村上氏の考えに従えば、今まで自分が当然として上に乗っていた前提を気づかされたとき、あるいは前提とはまったく別の視点に遭遇したときの驚きが自己解体であり、学問の楽しさだということになる。このとき退屈な学問は「喜ばしき学問」に変わると彼は言う。

また、小林康夫は驚きではなく世界を知ることそのものが学問の楽しさであるとした。いわば、発見の喜びである。知的的好奇心などと言われるのも、この知ることそのものの楽しさを意味していると思われる。

(b) 楽しさが生み出す空虚さ

しかし、なぜこの楽しさが空虚さを作り出すことになるのか。

要約すれば次のようになる。楽しさを感じる点は人それぞれ違う。そしてその点があわなければ、すなわち個人的な楽しさが共有できなければ発信者側の楽しさは伝わらず、受信者側には空虚なものとして現れてしまうということである。

例をあげよう。ある昆虫学者が新種の甲虫を発見したとする。彼にとっては先ほど述べた自己解体、あるいは発見の楽しみが現れるのかもしれない。しかし虫そのものに興味がない人にとってはどの甲虫も同じように見えるだろう。昆虫学者たちはこの発見に酔いしれるかもしれないが、一般の人からみればやはりその楽しさは理解できない。ここにはやはり空虚さが現れてしまうのである。

発信者が楽しみを学問に求める限りにおいて、この発信者側と受信者側の温度差は大きくなる恐れがある。それは楽しみというものが個人的な感覚・感情であるが故にである。

4、生きにくさから始まる学問

では、楽しさから始まる学問以外にはありうる形の学問は存在しないのか。この問いに対して私は「生きにくさ」から始まる学問という考え方をもって答える。しかし、先にも述べたように生きにくさから始まる学問においても、空虚さは払えないことが後に判明した。よって以下では前節同様、生きにくさから始まる学問とは何なのか、そしてなぜ空虚さが現れてしまうのかを論証したい。

(a) 「生きにくさ」とは

ここでいう生きにくさとは、人間が生活するなかで感じる不安や嫌悪、苦痛、苛立ち、違和感などのことである。生きにくさの原因となる対象は明確でない場合もありうる。また不安や違和感についても、はっきりしない、漠然としたものであることも考えられる。

生きにくさが自分の身の回りのことが常に対象となるわけではないことにも注意したい。例えば、自分の家の周りにホームレスが住んでいるとする。そして貴方が自分の生活と外の住人との生活を比べて後ろめたさを感じたとしよう。

この時生まれた後ろめたさが生きにくさである。この生きにくさが明確でない場合は次のような問いを立てられるだろう。すなわち「私が今感じた後ろめたさの正体は何か」という問いである。また、これが社会の経済格差に問題があるのではないかと考えたのならば「格差はなぜ生まれるのか」とい問いを立てられるだろう。前者は「私」に対する問いかけあり哲学的な答えが要求されるだろう。対して後者は「社会」に対する問いであり、社会・経済学的な答えが要求される。「社会」は広く「世界」と言い換えてもよいだろう。

今あげた問いかけは基本的に生きにくさを理解、あるいは了解するための問いだといってよい。問いを還元すれば「私」や「世界」がいかなるものかを知るための問いだからである。了解のための問いとは異なるものに解決のための問いを立てることも可能である。先ほどの例を使えば、「経済的弱者を救うにはどうすればよいか」という問いが成り立つであろう。このような問いの立て方は自身の生きにくさを解決するためのものである。当然、この問いは政策的な答えを要求することになる。

このような生きにくさから始まって、漠然としたそれを了解しようとする、あるいは解決しようとするというのが生きにくさから始まる学問である。

(b) 生きにくさが生み出す空虚さ

しかし、この生きにくさというものも楽しさ同様、個人的な感覚・感情であることに賢明な読者諸君はお気づきだろう。

例えば、騒音が非常に苦手な人がいるとする。少しの音が耳に入るだけでも不快であるというその人は「なぜ私はこれほど騒音を嫌がるのか」あるいは「社会から音をできるだけ消すにはどうすればよいのか」という問いを立てたとしよう。

これが学問という枠に入るのかどうかは度外視して、問いへの答えが体系的に理論化されたとして、多くの人が意味や意義を感じることができるだろうか。もしその理論だけを

みれば多くの人が空虚さを感じてしまうのではないか。それは疑いもなく、その人の生きにくさが共有できないからである。ちょうど楽しさが共有できない場合と同じように、生きにくさが共有できない場合には、やはり受信者側には空虚な学問が現れてしまうのである。

第三章：なぜ空虚な学問が現れるのか（総括）

5、学問観の非共有

第一章では私以外の人の意見から、第二章では私が考える、空虚な学問が現れる原因を考察してきた。本章ではそれらを踏まえ、空虚な学問がなぜ現れるのかについてひとまずの答えをだそう。先に私の結論を述べる。原因は学問観の非共有である。

東浩紀の考えによれば現代では大きな物語は凋落し、効力を失いつつある。学問においてもそれは同様であり、学問の意義や意味は各人が設定しなければならないと述べた。そこで現れたのが私的な意味を持つ学問観である。本論に従えば楽しさを求める学問や生きにくさを了解、解決する学問ということになる。そしてそれら自体がすでに空虚な学問を作りかねないものであることも述べてきた。

しかし、学問における大きな物語は完全に消滅したわけではない。平和やよりよい社会というものを大きな物語だと考える学問観はいまだにいくらかの説得力を持つ。特に技術と結びついた自然科学や成員の利益をもたらすような社会科学の場合には。そんな彼らから見ると私的な学問はひどく小さく見えるものなのではないだろうか。自分たちは大きな目標と理念を掲げる一方で、別の集団では実に個人的な学問が営まれているように見えるのだから。

まず、大きな物語を求める学問観を持つ人たちと私的な学問観を持つ人たちの間には学問の意義や意味は共有されていない。いわば分化しているのである。この状況においては自分の身近にいる研究者や学者であっても学問観が違えば空虚な学問は現れうるのである。

さらには、私的な学問観を持つ人たち同士でも、学問に対する意義や意味なりは共有されていない。楽しさから始まる学問と生きにくさから始まる学問ではその前提を共有しない限り空虚な学問はどちらにも現れてしまう。私的な学問を営む人の間でも分化は存在している。

まとめよう。まず「世間」とい存在が空虚な学問を作り出す構造を持っていることに異

論はない。阿部勤也の指摘は概ね適切である。次に「退屈な学問」はどの学問においても消すことはできない点で空虚な学問を作り出す原因ではある。が、学問そのものが持つ性質であるし、喜ばしき学問へと変更させる方法についても我々は見えてきた。今は置こう。

そして、上で述べた原因もあるが私が最も大きいと考えるものはやはり学問観の非共有である。大きな物語が凋落し、大きな物語を追い求めようとする層と私的な物語を設定する層に分化される。当然ながら私的な物語同士においても物語それぞれ異なるために、それぞれの層で、あるいは層のなかで学問に対する意義や意味は違うために空虚な学問が現れてしまう。そして、私的な学問観そのものが性質上他者と共有できにくい場合があればなおさら、空虚な学問は現れやすくなるのである。

6、結びにかえて

テキストを開く。簡素な前書きの後にはさっそく用語が並んでその学問の理論が展開される。講義に出席する。講師は専門の学問について深い知識を披露し学生たちの知的好奇心を駆り立てようとするのだろう。

本、特に専門書に「私は…の理由でこの学問を専攻した」というような記述がのっていることは少ない。「この学問は～の意義がある」という一般的な（著者が本当にその意義があるのかわかりはらず）説明を見ることはあるけれども。

その理由が何であるか。おそらく学問にとって著者の学問への動機というものは必要ないと考えられているからだろう。確かに著者がなぜこの学問を専攻したかを知らなくとも学問は成立する。しかし、その副作用は以外と見過ごされているのではないか。

空虚な学問が現れても構わないという人もいるだろう。しかし私は違った。時間をかけ、熱意を持って伝えられる言葉が空虚なものになることに不満を感じた。私的な学問の前提を共有すること。この生きにくさに対して出された私なりの解決策はこの程度でしかない（誤解を生まないように言っておけば本論の目的はあくまで原因追求であったが）。原因についての考察も不十分な部分があっただろう。結びにかえ、本論全体に対して批判を加えてみたい。

まず、学問を扱う勉強会であるにも関わらず福沢諭吉の名著『学問のすすめ』を参考にできなかったことがあげられる。内容について知っていることは少ないが学問を扱う上で

は読んでおくべき文献であったように思われる。

次に、参考ではありながらも論文形式の資料の方はまだ見にくさが取れない面がある。改行によって余白を作ろうとしてみたのだが、見やすくなったとは言えないだろう。

Section.2 でポストモダンを扱っておきながら、東浩紀の考えのみを用いたのも偏りがあつたかもしれない。そもそも大きな物語という概念自体がジャン＝フランソワ＝リオタールの指摘によるものだったので目を通すくらいのことをした方が理解は深まったであろう。

また、Section.3~4 での空虚な学問が現れる原因についての考察も足りない部分が多い。特に自分だけの考えで論理展開をしたことで説得力が欠けた点が大きいだろう。

まだまだ突けば穴がありそうな本論ではあるが、これ以上の批判や新しい視点を探るのは発表の場へと移したい。

最後に。この勉強会の準備段階で私が発する質問や意見を聞いてくれ、貴重な意見を投げかけてくださった方々へ。この場を借りて感謝を申し上げ、本稿の筆をおく。

【参考文献】

- ・ 竹田青嗣 『自分を知るための哲学入門』 ちくま学芸文庫 1993
- ・ 竹田青嗣 『現象学入門』 NHK ブックス 1994
- ・ 村上陽一郎 「自己の解体と変革」 『飲ばしき学問』 岩波書店 1980
- ・ 村上陽一郎 『科学の現在を問う』 講談社現代新書 2000
- ・ 東浩紀 『動物化するポストモダン』 講談社現代新書 2001
- ・ 東浩紀・大澤真幸 『自由を考える』 NHK ブックス 2003
- ・ 阿部勤也 『学問と「世間」』 岩波新書 2001
- ・ 中島義道 『生きにくい…』 角川文庫 2004
- ・ マックス・ウェーバー 尾高邦雄訳 『職業としての学問』 岩波文庫 1936
- ・ 小林康夫 編 『学問のすすめ』 筑摩書房 1998